

話^わじやれ (18)

岐久 ようこ

花売り家業も百年目

くずれても戻す

はみだすお肉の背中への横流れをふせぐ
離れていくバストを内側によせたい

私の宝もの 自慢のバストが

だんだんと成熟して

「これ 重力っていうの？」怖い法則ネ

でも下がつてくるバストを

コネクティング・パットで支える

これでキープして解決できますもの

「もう 持ちこたえられない！」ものもあり

「日に日に花が開いて散るまでだわ」

カーネーションの花ビラ

母の日のプレゼントなのに

コロナ危機で売れない

そこで栽培産地はネットで予約して

「オンライン注文を始めたらどうか」



ドライブ・スルーでお近くの花屋に

「取りに来ていただけますか」

持ちこたえられなくて

シオれてしまう前に温室でカットした

花束をお母さんの胸元へ

母の日の 思い出のなかに 魔女コロナ

カーネーション シルエットだけ 送ろう

白鳥の逃飛行

日本での越冬を終え

シベリアへ戻る頃になつて

なにか周囲が騒がしい

「コロナって?」

「三密がどうのこうのって」

私たちはもう帰るコロナ?

ひよっとして「鳥インフルエンザ」のこと?

「鳥」じゃなくて新型の感染症よ

「ホラホラ集まってる」と

密猟者にテッポウで撃たれる!

とっさに帰路先に向かつて

ひと足はやく飛び立ちました

こっちは演奏の開催日

「ふた月ほど早くて良かったワ」

そう述懐するのは民謡太鼓集団

コンサートを2019年12月に

ホールで開催すませていた

バチで打ち鳴らす大タイコは魂を揺さぶる

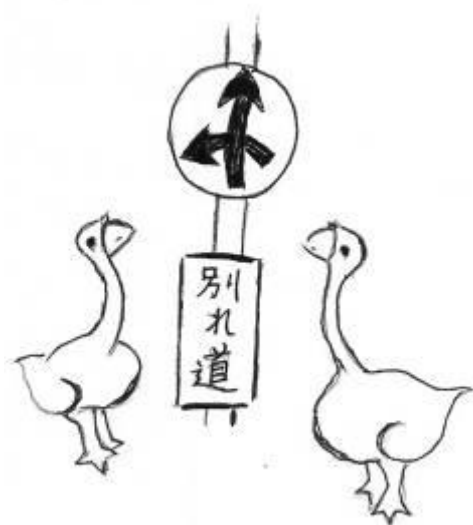
「どんどん」響かせたのは

感染予防の

お触れタイコだったかもしれない

ふた月ほど 前でよかった 演奏会

コロナかぜ 準備ばんたん 待っていた



試している内が花

初恋は試運転の始まりかしら

「ドライブに行こうか」となったとき

今ひとつ乗るのをためらって

「別の車に乗り換えましょ」

となることままとって

そうこうしているうちに誰だったかも忘れ

本番までいってしまっちゃった

ずっと後になって

「あの人がまじだった」なんて

甘酔っぱかったオレンジ・ジュースが

舌からノドへとおち体ももじもじ

キレイな初恋のままインプリントされて

仮想のような夫婦生活がつづく

この頃は「骨粗しょう症」が心配になる

緑のピーマンより赤パプリカが

ビタミンCが多いとか

日光に当たったらビタミンDがとか

タマネギは生の方がとか

あれもこれもと

試している頃が花でしょ

初恋は ビタミンCの ようなもの
このごろは 活性酸素を 求めてます



新生活は転回させて

怒ったら

ふくらんでトゲをだす「ハリセンボン」

漢字でなら針千本

その姿勢で「近よるな」と

表現しているその見事な習性

ところが、相手は

「残念ながら、さして興味ないね」と

まだ睨んでる

その反応みて引き出す次なる技は

大興奮して丸くなって「針の山」

仏教にあるという針が一面に突きでている山

まだ諦めずにいるようだ

「針のムシロ」苦しくつらい場所

「あの時は針のムシロに座っているような

気持ちがあった」の表現ですが

これは無理 ムシロにはなれない

「針とばし」この技もしかして！

技を磨いて将来の防護になるかもしれない

新型コロナ・ウイルスですが

新しい生活に慣れていくことは

人の生き延びていく上の
進化の過程かもしれません

カピバラは 耳をたたみ 泳げます
人間は 鼻をたたんで できかねる

